http://f-env.sakura.ne.jp

府中かんきょう市民の会

NPO法人　府中かんきょう市民の会々報
２０１３年　冬号　　1月　9日発行／季刊
発行人：竹内　章
連絡先：府中市分梅町　1-20-3
TEL 042-364-3428

押立の歴史と文化を巡る

昨秋の11月10日、秋晴れの中「小柳町3丁目まちづくり勉強会」の主催で地域の歴史と文化を巡る散策会が催されました。

この会は、より暮らしやすいまちづくりを目指して有志が集まり発足した会です。まちを知り、まちを愛することがまちづくりの第一歩と考え、毎月「小柳町3丁目探索の記録」を発行し町や周辺地域の昔の姿を追い求めたり、町内で起きたほのぼのとした出来事などを紹介しています。

観光ガイド標識「ききん救った平右衛門」に導かれた龍光寺（奥）の墓地には川崎平右衛門が眠っている。手前は押立本村神社。

昔の水車跡を尋ねながら龍光寺へ

今回は隣町、押立町の「古い地名、用水路跡地、史跡を巡る」という内容で府中市ふるさと文化課の庄司明由氏を講師に開催されました。参加者は総勢23名。老いも若きも私たちが暮らしている隣町の歴史と文化に思いを馳せ古き時代の面影を偲んで集まりました。

コースは小柳町3丁目の鶴代公園を出発点とし、サグテン堀跡地の三御殿堀緑道。花火工場の跡地の押立緑地…ここは、かんきょう市民の会が月に2回、公園清掃活動をしています。東へ進み府中東高校の北側を通る車堀跡地。車堀には山口家そば店の裏側、坂本畳店あたりに「遠藤車」と「よし車」の2つの水車が並ぶようにあったそうです。次に中央高速道路を南へ抜けてミッチャン水車跡地を訪ねましたが、地元の長老に話を聞いても、場所、存在は確認出来ません。旧常久村、押立二か村用水の本流であった押立堀・裏の川跡地を経て、次に立ち寄ったのは龍光寺と押立本村神社（写真）。

龍光寺（天台宗）の本尊は平安時代に造られた阿弥陀如来坐像（市重要文化財）です。ここには、押立村の名主として新田開発に取り組み、江戸幕府の奉行になった川崎平右衛門定孝の墓があります。古びた墓石に歴史を感じました。この寺に隣接して小さな押立本村神社があります。多摩川の洪水による村分断後に創建された神社です。この神社の先、押立文化センターの庭先に押立地名の碑が建っています。碑には、押立は現在の押立通り・押立文化センター北側道路沿いに集落の中心があり、集落としては大きな方であったことや、慶長元年（1596）の洪水によって南北に分断されたため川の南に向押立（稲城市）を残して定着したことなどが書かれていました（写真）。

押立渡しの名残り、渡船場道から多摩川へ

この碑から少し戻り渡船場道（とせんばみち）を多摩川へ向かいました。多摩川の北側を多摩川通りが東西に走っています。道の脇には押立渡しの碑が建っています。押立渡しは押立と対岸の押立南部（現稲城市）とを結んでいた渡しで、下流の多摩川原橋や上流の是政橋の開通によって次第に消えていったようです。

多摩川を後に押立通りを北へ進むと左側に押立神社があります。この地が万葉の時代「てつくりの里」と歌われた土地だからか、「手津久里稲荷」と称していました。神社の境内にある小さな祠は十八世紀にさかのぼり、府中の神社の中でも古い建物として当時の姿を留めています。押立神社を西へ進み、短いが川越街道・古川道（先で小金井街道と合流して川越へ通じていることから川越街道と呼ばれている。古い絵地図に見える品川道と交わるこの道が古川道だとの説もある）を歩き、押立緑道を通って出発点の鶴代公園に戻って来ました。

参加者は心地よい汗を流し、3時間弱の散策を満喫しました。今回は高齢者の参加が多く、特に日頃から家に閉じこもりがちな男性の姿が多く見られたことはとても有意義でした。

（吉野　実）

田んぼの学校 収穫祭　親子でたのしくオニギリづくり

田んぼの学校2012の収穫祭＆修了式が、11月４日、片町文化センターで行われました。当日は、生徒32名、保護者44名、スタッフなど総勢115名が参加し、大盛況の実り多い収穫祭となりました。

田んぼの学校は、昨年は福島原発事故の影響で開催出来ず、2年ぶり、7回目の開催でしたが、自然の恵み大切さ、皆が力を合わせることの素晴らしさを、親子そろって体験することが出来ました。

収穫祭・修了式に115名参加（11月4日）

昨年の田んぼの学校は、5月26日の田植え、7月7日の草取り・生き物さがし、9月22日の稲刈り、そして11月4日の収穫祭・修了式の4回開かれました。参加者は小中学生が中心でしたが、熟年世代も加わり総勢45名が東京農工大学本町農場で、力をあわせ稲作に取組みました。

収穫祭・修了式当日の11月4日は、受付開始の朝9時前には、多くの生徒や保護者が受付前に並びました。参加者は受付順に希望を出し、豚汁作り体験、おにぎり体験、わら細工体験、会場設営の4コーナーに分かれて、9時半から11時まで、収穫祭の準備を行いました。

おいしい豚汁作り、人気の縄作りコーナー

この日の主役、収穫したお米を使ったおにぎり体験コーナーと豚汁作りコーナーには、20名余が参加しました。子ども達が小さい手で、ご飯を100グラム計り、ラップに盛って、いろいろな形の390個のおにぎりを握りました。センター調理室をお借りした豚汁作りは、3つの大鍋に水を沸騰させ調理をスタート。生徒さんの中に調理の専門家もおられ、野菜たっぷりの美味しい豚汁が、テキパキと出来上がりました。

一番希望者が多かったワラ細工体験コーナーには、18名が参加しました。スタッフの指導のもと、なわない（縄作り）に挑戦、うまく出来ず涙目になる子もいましたが、お父さんの激励で縄が出来上がり、笑顔がこぼれました。全員が縄作りに成功し、ものづくりの難しさや楽しさを体験しました。

ボク、おにぎり作ってまーす

農工大 大里先生、高野府中市長が祝辞

収穫祭・修了式の会場も参加者主体で設営されました。花飾り、テープ張り、看板やテーブル配置など、素晴らしいチームワークで、開会の準備ができました。

田んぼの学校収穫祭・修了式は、11時30分から始まりました。冒頭に、主催者の本会竹内理事長から「府中の農地が減少しており、米作り体験をとおして、環境問題を皆さんと一緒に考えていきたい」との挨拶がありました。田んぼの学校に対し、第一回から支援、協力頂いている東京農工大学の大里先生、府中市の高野市長、堀口環境安全部長から、それぞれ来賓挨拶を頂きました。また、農工大の千賀先生からのお祝いメッセージが紹介されました。

修了式　緊張の面もちです

記録ビデオ上映、絵日記発表そして修了式

全員の「いただきます」との大きな声で、ちょうど正午から会食が始まりました。自分が作ったお米を食べるのは、ほとんどの参加者が初めての経験でした。「美味し～い」の声が、会場にあふれました。具が沢山入った豚汁も大人気、何杯もおかわりする生徒が続出しました。

会食の後は、田んぼの学校記録ビデオの上映会、一所懸命、泥んこになり稲を育てる自分の映像に、子ども達は釘づけになりました。続いて、絵日記等の発表がありました。稲の育ち、田の生物たちが、絵日記に、いきいきと描かれていました。感想文発表では、生徒、保護者から「とても貴重な体験が出来た」との感激の声が、次々出されました。

農工大生のお米クイズなど、面白く勉強になるお話しのあと、写真入りの修了証書が生徒一人一人に手渡され、収穫祭・修了式は、14時に閉会になりました。

参加者、ご来賓、収穫祭の進行にも尽力頂いた農工大生、29名の市民の会スタッフの皆様に、心から感謝いたします。

（落窪一人、村崎啓二）

ごみゼロのエコクッキングを目指して

今年の収穫祭は130名の申し込みがありました。調理担当の私達は、まず調理室を下見して、鍋や食器が足りるかどうか調べました。はしが不足していたので、「椀もあ」から借りる事にしました。野菜などの材料は「畑の学校」に依頼し、足りない分だけ卸売りセンターで購入しました。

当日、豚汁作りに参加してくださった方々は、とても手際よく調理してくださいました。そのせいか、豚汁は大変評判がよく、お代わりが続出。すべてなくなりました。

おにぎりは「ゆかりと梅干」「しそ若布ちりめん」「黒ゴマと白ゴマ」も3種類を作りました。子ども達の中には「魚の形」や「英語の形」などユニークな形のおにぎりを作っている子も見られました。父子でご飯を100gずつ量ってくださったり、父親の出番も結構ありました。

里芋の皮や葱の青い葉は、黒崎さんがEM菌で堆肥にするために持ち帰り、大根と人参の皮は私が家で煮て、スープを作り、味付けはおにぎりに使った梅干しの種を使用しましたので、最終的には調理では野菜の生ごみは全く出ませんでした。

おにぎりを包んだ「ラップ」のみが、ピンク袋の容器包装プラスチックごみとなりましたがこれもリサイクルされます。

これからの収穫祭への提案

①参加者は「お皿、お椀、はし」を持参する事。乳酸飲料は当日になってからあることを知らされ、やむなく紙コップを使用しましたが、これも各自がコップを持って来れば、それで済みます。

収穫祭でのエコクッキング

②収穫祭・修了式に多くの方々が参加して祝ってくださることは大変嬉しい事です。しかし「田んぼの学校」は府中市の委託を受けて行なわれています。つまり税金を使って運営されているのです。親子3人までは無料で参加。それ以上は一人につき100円参加料を集めてはどうでしょうか。

③収穫祭の調理の時に、どうしていつも市民の会の女性会員に声がかかるのでしょうか。野菜を提供してくださる「畑の学校」では、男性講師の料理教室が開かれています。そういう方にも声をかけて参加を要請してほしいものです。実際「おにぎり作り」では父親の出番もありました。おいしい料理を作って食べるのは楽しいものです。男女の区別なく誰でも作れるようになりたいですね。(梅沢みどり)

田んぼの学校 収量調査(2012年)

今年の田んぼは、右の写真のように、一面に雑草が繁茂していた。手取り、田押し車による草取り作業にもかかわらず、下に示す写真のようにクログアイが大豊作(?)となった。

さらに、イネを覆いかくすタカサブロウ、イネの分(ﾌﾞﾝ)けつを阻害しイネとの見分けがつきにくいヒエ、やさしい体型のコナギなども発生していたが、クログアイが優先化していた。こういうことは初めてだった。

クログアイの群生

単子葉植物カヤツリグサ科ハリイ属に所属する草本。湿地に生育し、土中に地下茎を長く這わせる。イグサ、コゴメイと間違いやすい。イグサは茎の中に芯があり、コゴメイは花茎に隔壁があるが塊茎がない。

水田多年生雑草で、難防除雑草として定着している。水稲の分けつが抑制され、穂数が減少し、減収効果が大きいと解説されている。

雑草が一面に繁茂した水田

【サンプリング】　田んぼの平均的な場所(クログアイが一面繁茂して面積が最も大きい)から、2m×10mの区画を設定し、刈り取り・はさかけをし、ハウス内で乾燥し、脱穀・籾摺りを行って玄米重を計った。

【結果】 玄米　3．34kg／20㎡

3．34kg×50＝167kg／10a

【考察】 サンプリング区画のイネ株数は10本前後と分けつ数が少なかった。

全国の平均収量は、540kg、東京都は415kg／10aと予測されている。30－40%程度の収量であった。減収の主原因は、サンプリング区画の様子、マイ稲の成長記録と周りの優先雑草種等から判断してクログアイと断定してよい。

年々、発生が広がり、今年は水田全体に繁茂した。イネの減収効果だけでなく、他の生態系が絡む圃場試験に影響がでる恐れがあるので、除草剤防除だけでなく、耕種的防除方法を記載した文献を提供して防除実施をお願いした。(竹田　勇)

多摩川でキクイモ探しと芋汁会

水辺の楽校2012年最後の催しは、11月24日の河原のキクイモ探しです。リーダーの、「それでは始めて！！」の声とともに、子ども達は一せいに枯れたキクイモ（正しくはイヌキクイモ）の茎の根元を掘り始めます。でも殆どの子供はチョット掘って見つからないと、直ぐに別の場所に移ってしまう。大人もつられてウロウロ。

「根元の回りを、もっと広く集中的に掘ってごらん」。スタッフに云われても、子ども達はなかなか落着きません。スタッフの声かけに先ず腰を据えたのは、やはりお父さん、お母さん達でした。「○○ちゃん、ここもっと掘ってみようよ」。そして漸くみんなが本格的に、キクイモを堀りはじめたのです。大人も子供も、だんだん夢中になってきます。

ところで、人間と自然との根源的な関わり方の中に、山菜採り、きのこ採り、磯での貝採り、小鮒釣り等々、生業活動の陰にありながら、意外なほど熱意を持った自然と関わり方がありました。今日の「キクイモ掘り」という遊び、大人も子供も、みんな生き生きとしていました。

「小父さん、お代わりしていいのかな」。「あゝいいよ、何杯でもお代わりしてみな」。夢中でキクイモ掘りをした後の子供達の胃袋に、芋汁は「待ってました」らしい。

河原のオニグルミの木立の下に広げたブルーシートの上、近くの石の上、各自思い思いの場所で食べる、熱々の芋汁がことの外美味しい。

多摩川河川敷のキクイモ掘り

「オレこれで6杯目」と云ってお代わりして来たのはK君。「ボクは4杯目だ」とT君もよく食べる。二人共この三年間、子供実行委員として、みんなの先頭に立って活動（遊んで？）してきました。随分逞しくなったな、と爺さんスタッフはニヤリとして、思わず「お代わりあるかな」。

「外で食べると、なんでも美味しいんてすよネ。家ではこんなに食べることはないんですヨ」と、お母さんも結構食が進んでいます。そう「野遊び」は楽しいものです。日本人は万葉の昔からこうして、自然の中で楽しんで来ました。そして今私たちの中に脈々と受け継がれ、きょうの芋汁会を楽しんだのでした。そしてきっとこの子供達も、この楽しさを受け継いで行ってくれるでしょう。（椛島弘通）

会ホームページのリニューアル

＜主な変更点＞

当会ホームページ（以下HPと略）を、現在の活動状況に応じて作り直しました。主な変更点は…

（1）会の活動状況、写真などを、現状に応じて新しく書き直しました。

（2）過去12年分の会報全てを、カラーで閲覧できるようにしました。

（3）府中市内の活動区域を地図情報でビジュアル化しました。

（4）実務で使う活動報告書などをHPから出力して使えるようにしました。

（5）ブログとのリンクで、臨時の連絡・更新も随時にできるようにしました。

今後も必要に応じてHPを更新していく予定です。

新しいHPのURLはhttp://f-env.sakura.ne.jp/で、会報の2011年秋号以来会報のトップにも表示しています。どうぞご覧ください。

＜変更作業の内容＞

HPの管理委託先（プロバイダー）を変えました。

作業分担は、HPの仕組みづくりは山田さんが、記事や写真は各活動の担当が、会報のデジタル化は舘さん、その他は竹内理事長が担当。作業期間は構想段階から約1年でした。

＜変更の影響・効果＞

これまで、情報の更新サイクルが不十分だったものを、直近の活動がHPから見えるようになりました。過去の会報（46号分）すべてをHPで閲覧できるようにしたことで、紙での会報とあわせて、より活動内容をPRしやすくなることも期待されます。新入会会員も「事前にHPをチェックした」とのことです。スマートフォンなどの携帯端末が一般的になれば、利用もより容易になってくると期待されます。（小西信生）

府中見て歩きツアー

☆ ☆ ☆　☆ ☆ ☆

名木といききの道を歩く

府中NPO・ボランティア活動センターの「シニアの皆さん!街にでてみませんか」との呼びかけで、昨秋10月26日(金)にウォーキングツアーが実施された。当日は快晴、市民の参加者は23名。案内役は当会の竹内理事長(名所史蹟担当)と野口(名木など植物担当)、それに日本ウォーキング協会の河野氏の3名。「名木といききの道」は、多くの名木や由緒ある神社仏閣を訪ねながら、ハケの道(府中崖線)を歩く人気のコースである。ツアーで出会った名木を中心に報告する。

名木は府中市のマクロな環境指標

10時30分、グリーンプラザを出発。府中では珍しいケンポナシの名木を皮切りに、馬場大門のケヤキ並木を経て大国魂神社に入った。境内は名木の宝庫でケヤキ・モミ・ムクノキ・コウヨウザン・イチョウの大木がある。本殿の裏のオオイチョウは、明治14年に幹回りが9mあったといわれ、樹形は崩れているが、しめ縄が締められた姿は数百年を生き抜いた風格が感じられる。

金毘羅神社から府中崖線を下り妙光院へ。ここにはイチョウとボダイジュがあったが、ボダイジュは枯れてひこばえだけになり名木から削除されている。103本の府中市の名木が選定されたのは昭和63年である。しかし指定から24年あまりが経過し、衰退や枯損が進み現在では81本になっている。名木は市内全域に散在して様々な環境の変化に耐えながら生きているので、府中市のマクロな環境指標の一つと考えることができないだろうか。

のびのびと枝を広げた滝神社の大ケヤキ

滝神社の大ケヤキ

中田家のクスノキ、競馬場宿舎のアキニレ・鳩林荘のヤマザクラ・競馬場通りのケヤキ並木を見て、東京競馬場に到着(競馬開催日以外は一部が市民に開放されている)。ここで15分ほどウォーキングの指導を受けたのち、芝生広場で昼食となった。

競馬場からハケの小路に戻ると「いききの道」の由来碑があり、ほどなく滝神社に到着。崖の下からちょろちょろと湧水が流れていた。ここの大ケヤキはほとんど剪定されず、のびのびと枝を広げ、ケヤキ本来の姿を保っている。その後、東郷寺のイロハモミジ・シダレザクラ、小勝家のカキノキ、本願寺のサイカチ・ケヤキ・サルスベリなどの名木を見た後、八幡社でスダジイの実を探して、14時50分にツアーは無事終了した。(野口道夫)

援農ボランティア収穫祭

援農活動に参加している当会会員と農園主が一堂に集まる援農収穫祭が昨秋11月25日(日)12時から小林農園主(南町)の前庭をお借りして賑やかに開催されました。集まったメンバーは、3人の農園主(写真左から市村さん、田村さん、小林さん)、我々会員(非会員も含む)、及び今年から活動に参加している農工大生5人合計23名でした。この援農活動も今年9年目を迎え農園も3軒に拡がり、参加者も20名を超え、更に農工大生も加わり人気も高まっていることはうれしいことです。

当日は好天に恵まれ、会場には、バーベキュー、焼きそば、鈴木夫人手作りのけんちん汁、飲み物が用意され鈴木夫妻や農工大生達が料理人になって楽しい歓談の場になりました。

ビールを飲みながら、農園主から野菜作りのお話しを聞いたり、会員同士の活動を話したり、農工大生達と笑談したりで2時間がアッと云う間に過ぎて行きました。

3人の農園主を囲んだ収穫祭

最後に、活動の場を提供していただいている農園主に感謝し、来年も更に盛り上げてゆこうと約束して楽しい会を終えました。

(羽尻元彦)

援農活動へのお誘い

私は、2年前から小林農園で月2回(第1、第3木曜日)2時間の援農を行っています。木曜組は、竹内さんをはじめ5人の仲間がいますが、毎回3名程度での作業となっています。

< 6ページへ続く >

私は、サラリーマン家庭で育ち畑とはあまり縁がなく、70歳を過ぎての農業の手伝いは「きつい」と思い、積極的には援農に参加しませんでしたが2年前これも体を動かすいい運動だ、2年間だけやってみようと思い参加したのでした。

仕事は朝9時から、畑の草取り、収穫済み野菜畑の片づけハウス撤去の手伝い等で、休憩を取りながら2時間の作業ですが、仲間と手分けしてやると時間がすぐに過ぎてゆき、きれいになった畑を見ると不思議な達成感を感じます。

確かに真夏、ハウスの中で作業すると汗だくになりきついと感じることもありますが、農園主の小林さんからお茶の差し入れを受けたり、野菜のおみやげを頂いたりして疲れも和らぎ、今では体が続く間は続けていこうと思っています。

小林農園ではいくらでも仕事はありますし、もう少し人数が多いと作業も早く進み、もっと楽な2時間になると思うことがよくあります。

月2回、2時間の体の運動です。日頃あまり体を動かしていない会員の皆様、私のように「運動だ」と思って一緒に参加しませんか。

農家のご苦労や野菜作りの知識も少しづつわかり、今月も休まず行くぞと思っている自分を見てつい笑ってしまうのです。　（羽尻元彦）

援農は農学生にとって貴重な機会

私達、農工大ボランティアサークル「ほっこり」は、毎月第2日曜日と第4日曜日に援農に参加しています。援農を通して、都市農業が減り続ける時代に専業農家として頑張る農家さんと農工大で農業について学ぶ学生が運命的な出逢いをしたと私は思います。農家さんのお手伝いに行く事で農家さんが助かるのはもちろんのこと、座学がほとんどの農工大生に本当の農業とは何か、大学で学ぶ農業と実際の農家さんがやる農業との間にあるギャップは何かを少なからず援農は教えてくれました。

援農で行なうこととして、まず雑草取りが挙げられます。たかが雑草取りと思われるかもしれませんが、農業は雑草との戦いとも言われるほど雑草は厄介な存在であるため、雑草は侮れません。その他に援農では、セルに播種したり、堆肥を入れた土を畑にあげたり、農業機械を動かしたり、野菜を収穫したり、収穫した野菜を袋詰めしたりと、農業の一連の仕事に一部分ではありますが関われました。座学がほとんどの学生にとって援農は本当の農家さんに出会える貴重な機会と言えます。

私としては援農がこれから先も府中の農家さんと農工大生をつなぐ架け橋であり続けることを切に願っています。また、農業は人手がいるので興味のある方はどんどん援農に積極的に参加してもらいたいと思います。

（白神正大・佐藤　快／農工大生）

地元野菜、引き売り奮戦記

貢献型コミュニティビジネスを目指して

昨年五月、貢献型コミュニティビジネス・八百屋「すくらも商会」を開業しました。仕入れは市内近郊農家からの直接購入が中心、販売は引き売りで、その昔おじさんが、くろがねの三輪車に野菜を満載して売りに来たあれです。

始めた動機は、人生の第2ラウンドは①会社延長の仕事はせず②好きなことをしながら③地元に貢献した仕事をすることを目指していました。そして、趣味の野菜作りの延長線上で地元農産物の拡販を生業とし、買物が不便な地域で販売すれば地産地消推進と買物弱者支援にも貢献、かつ商売繁盛となれば万々歳、引き売りのイメージが完成、異口同音にやめとけ！　という声を背中にスタート。

人の褌で相撲をとるにも努力が必要

人の作った物を売るだけじゃないかと悪友はのたまうが結構大変。販売の数日前より巷の価格をにらみつつ地元野菜の販売状況や当日の天気をチェックし作戦を立てます。また、チラシの配布でPRにも努めます。“段取り八分”で準備ができれば後は実行あるのみ。当日は朝一番に援農で懇意となった農家より新鮮野菜を買いつけます。調達できない野菜はJAや市場で補い、百戦錬磨の奥様方の要望に応えます。野菜を並べ値札を作り、いざ出陣、押立町や浅間町のマンションに向かいますが、売れ行きはその日の風次第。閑古鳥が鳴くと「風吹けば…」ではないけれど、客が来ない→野菜が残る→我家の冷蔵庫が満杯になる→毎日野菜を食べる→健康になる？

その一方で、安くしとくから儲けてきな！と農家の親爺さん、車が来るのを待っていてくれるおばあちゃん、地産地消の趣旨に賛同して知人、友人を紹介してくれる方…など、なぜか励ますつもりが励まされていました。

井戸端会議に花を咲かせたい

商売を始めて感じるのは、宅配弁当、ネット販売の車の多さで、高齢になると買物が大変、調理も簡単にと言う人も多いのです。ご近所付合いも減っているのでは？

車の止まる場所は小さなコミュニティの場にもなります。実際、調布市では市が音頭を取り、八百屋と魚屋が販売車を連ね買物不便地域に出向いて買物弱者支援を試行して好評のようで、輪の広がりが期待されます。まだまだ試行錯誤の連続ですが地域の皆さんに喜んでもらえたらとの思いで頑張っています。（菅原　千秋）

再生可能エネルギーは　どこまでできたか

東京から考える　これからのエネルギー

平成24年12月4日に都庁の都民ホールで「地球にやさしい環境づくり都民フォーラム」が開催されました。主催は、当会も加盟している「公益社団法人東京のあすを創る協会」で、毎年この時期に東京都環境局との共催で、NHKや東京都地球温暖化防止活動センターの後援を得て、開催されています。

今回は、東京おける「再生可能エネルギー」について、どこまで進んでいるか一緒に考える“つどい”という主旨で開催され、約200名が参加されました。

「基調講演」として、NHK解説員室山哲也氏による「再生可能エネルギーの今と未来」と題して、概略、次のような講演がありました。

①日本における「再生可能エネルギー」はわずか1％。

原子力発電所がほゞ停止状態にある中で、水力発電もわずか8％に過ぎづ、殆どが火力発電に頼っている。

②「再生可能エネルギー」をどう育てるか。

「再生可能エネルギー」のメリットとしては、資源が無尽蔵、クリーン性などがある一方で、デメリットとして効率性、コスト高、不安定性が指摘されている。

③日本は「再生可能エネルギー大国」である。

日本の自然力は、陸地面積では世界第61位であるが、海洋面積は第6位、地熱は第3位、森林は先進国で第2位となっており、自然エネルギーの宝庫である。

④エネルギーの「地産地消」をめざせ。

日本には大小の河川が無尽蔵にあり、この水力を活用して「小水力発電所」を設置して、エネルギーの地産地消を目指すことにより、地域を豊かにする事ができる。

基調講演の後、NHK解説員室山氏のコーディネーターによりパネラーとして参加された東京ガス環境部長、MeC西東京生活会議代表、東京都環境局再生可能エネルギー担当課長によるパネルディスカッションが開催されました。

（竹内　章）

NHK解説員　室山哲也氏

多摩川由来の崖線の魅力

府中崖線　西府崖線を中心に

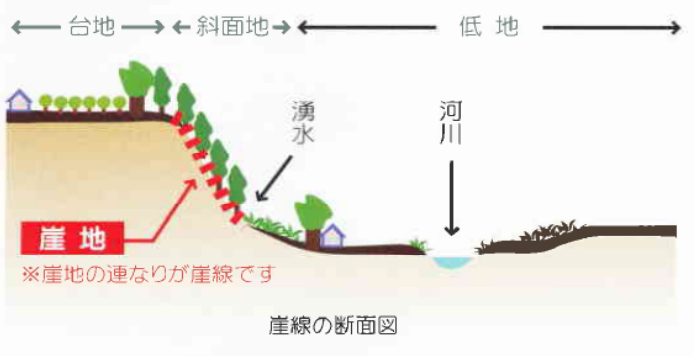
多摩川由来の「崖線」とはなにか。また、その魅力を、府中市内の府中崖線・西府崖線を中心に考えてみたい。

「崖線」とは？

聞きなれない「崖線」とは、なんであろうか？

文字どおり崖の線（連なり））である。少し難しく言えば「河岸段丘」のこと。河川（多摩川等）が、気の遠くなるよう長い時間をかけて台地を侵食して、造られた崖地の連なりである。その特殊な地形のため乱開発からまぬがれ、今では都市における貴重な緑の空間になっている。

ちなみに、崖線は、武蔵野の方言では「ハケ」と「ママ」という。しかし、そのほかにハゲ、ハッケ、ハバ、ホキ、ホケ、タキなどいろいろとあり、それぞれ地元の人に親しまれた名前がついている。



崖線の断面図

崖線の魅力

我々人類は、「緑」のもつ様々な機能から恩恵をうけている。その「緑」は生き物の生息の場、目にやさしい豊かな景観、ヒートアイランドの緩和、憩いの空間などの安らぎを我々にもたしてくれる。

20世紀の乱開発によって「緑」が極端に減少した都市部においては、貴重な空間になっている。その崖線の魅力を具体的に、府中崖線と西府崖線を中心に5点ほどしめす。それらを、次世代に引継ぐことが我々の責務ではないだろうか。

①わき水／台地にしみこんだ雨水が地中の不透水層に到達し、その上を地下水となって流れる。その地下水が崖線の中腹から外界へ流れ出る。西府わき水、御瀧わき水等

②名木・大木／崖線は急傾斜のため樹木が伐採されることなく、多くの大木・名木が残った。鳩林坂のヤマザクラ、瀧神社のケヤキ、府中段丘のアカシデ等

③希少な動植物／湿潤な土壌と乾燥した土壌、わき水・用水の水辺の豊かな自然環境には多くの生き物が棲息。カワセミ、ホトケドジョウ、オドリコソウ、キツネノカミソリ等

④歴史的文化遺産／崖線の上下には、その緑と一体となった社寺が多くあり、地域のシンボルとなっている。大國魂神社、東郷寺、高安寺、鳩林荘、妙光院等

⑤憩いの公園／崖線の緑と一体となった公園は市民の憩いの場となっている。市川緑道、清水ヶ丘緑地等

（葛西利武）

皇居東御苑のみどりを案内して

○観察会開催の経緯

昨年11月21日（日）に、府中市環境保全活動センターの主催により、「皇居東御苑の歴史とみどりを訪ねて」と題し観察会を行いました。不肖、私が案内役に指名されましたので、開催の経緯や主旨、ポイントなどまとめてみました。

○東御苑の特徴と観察ルート

東御苑は、東京都千代田区1丁目1番地の皇居の一部で、昭和43年に公開されました。面積は21ヘクタールです。江戸城を偲ばせる史跡と同時に首都東京の都心とは思えない静寂で、みどり豊かな環境が保たれています。

近年の入苑者は、年間約90万人で、うち外国人が約30万人です。今回の観察ルートは次の通りでした。

（スタート9時半）大手門→三の丸尚蔵館前→三の門（同心番所～百人番所前）→中の門跡（大番所前）→中雀門跡→本丸→本丸展望所→果樹古品種園→富士見櫓→松の廊下跡→タケ見本園→天主閣跡→楽部前→汐見坂→二の丸雑木林→二の丸庭園→都道府県の木植栽地→（解散12時10分）

○主なポイントの説明

大手門手前では濠の魚類の在来種と外来種の生存競争、尚蔵館横のジュウガツザクラの開花、本丸の300年生クスノキ、本丸展望台から二の丸雑木林の自然の緑と丸の内ビル群の環境の対比、江戸前期の小堀遠州作の二の丸庭園とハナショウブ、昭和43年公開に合わせ植栽の都道府県の木などでした。

特に私の思い出深い二の丸雑木林については、本丸展望台から見る雑木林の計画と雑木林内の探勝では、次のような解説を致しました。

○雑木林の計画と造成

昭和55年9月に東御苑二の丸の芝生地の樹林化構想の意向について、担当侍従から突然伺い驚きでしたが、基本的には主旨が理解できますので、早速慎重に検討を進めました。

検討の要点は、どのような樹林にするかです。先ず土壌を始め気温、降水量など立地条件を確認し、次いで我が国は南北3千キロに447の植生群落があり、適切と考えられる植生を抽出した結果、第一候補は落葉広葉樹林でした。この群落は四季を通じ最も太陽エネルギーを効果的に利用するので、樹林が変化に富み植物観察に最適です。林相は良く知られるクヌギ-コナラ群落（通称、武蔵野林）です。

次の確認は、移植樹木や工夫のしどころの地衣植物の入手です。いずれも入手可能でした。

大筋ではこうした検討結果がまとまり、昭和60年に整備が完了、現在では27年が経過し安定した樹林となっています。

私は訪れる度に探勝者に「こうした樹林が都心にあることをどう思われますか」と聞いていますが、多くの入苑者が関心を持ち、評価され親しまれていると承知しています。

○雑木林造成の背景

そもそも何故、芝生地を樹林化したか。そのルーツですが、雑木林整備完了後の昭和63年生物学研究所発行の「皇居の植物」の序文に「…自然の保護がますます困難になるであろうが、自然を親しむことが大切である。武蔵野の自然が都心から遠ざかってしまった今日、この地に武蔵野の植物をよみがえらせたい。…東地区（東御苑のこと）は自然の景観が落ち着いてきたように思われる。…」（裕仁の署名）と記されており、自然に対する畏敬の極みと思われます。

本丸の天主台前で参加者の質問に答える（左）。二の丸の雑木林を探勝（右）

○付記

恐縮ですが私事を一言、昭和54年から59年まで、環境庁の命により宮内庁に5年間出向し、緑の管理や整備の業務に従事した経験から、今回の案内役を引き受けさせていただきました。

探勝中、各ポイントの説明は、時間の関係で十分できなかったとの反省もしていますが、植物を始め歴史やエピソードなどを交えて説明したつもりです。

参加者は府中の方々25名で、スタート前に「植物に詳しい方が参加していると思いますので、遠慮なく皆さんに教えてください」とお願いをしましたので、発言も多く和気あいあいの観察会でした。（大崎清見）